

#書評



腹痛への哲学書—— 今求められる医師の資質

評者 平島 修
徳洲会奄美ブロック総合診療研修センター



腹痛の「なぜ?」 がわかる本

痛みのメカニズムが
みえれば診療が変わる!

腹痛を「考える」会=著

定価: 4,400 円(本体 4,000 円+税 10%)

A5 判・266 頁/医学書院/2020

[ISBN978-4-260-03836-2]

3年前のある勉強会で著者と初めてお会いし、懇親会で「腹痛」の話で盛り上がった。腹痛診療で最も有名な教科書『Cope's Early Diagnosis of the Acute Abdomen』の最新版は22版で(初版1921年)、現在は弟子に引き継がれて出版されているが、初期の版でCope自身が書いたある疾患の所見に対する考察が興味深く、身体診察を深めようとする自然に古書探しが必要となり、それが楽しいと著者はお話されていた。医学が大きく進歩したのは1900年前後で、死後の解剖によってしか原因がわからなかった時代から、技術革新により画像診断が可能となり、診断技術は大幅に向上した。今のような検査機器がなかった時代は、病歴・身体所見のみから病態を考え、悩み、決断せざるをえなかった。医師の仕事とは、「考える」ことだったのである。

「パターン認識」ではなく「考える」診療に

さて、誰も便意を催した時に、脂汗をかくほど強い腹痛を感じた経験をしたことがあるのではないだろうか。実際、排便に伴う腹痛で救急外来を受診する患者も決して少なくはない。激しい腹痛であっても、その原因は便秘症から消化管穿孔や大動脈解離まで重症度の幅は広い。またその診断は、画像検査を行っても容易でない場合もある。病歴・診察所見から十分に検討されないまま、腹痛の原因を「腹痛+下痢+発熱」は感染性腸炎、心窩部から「右下腹部痛+McBurney点」の圧痛は虫垂炎と、短絡的な一発鑑別診断を行うと落とし穴にはまりかねない。本書は種々の腹痛の原因に対して、「なぜ、どのような経過で生じるか」を、身体所見のもととなった1900年前後の文献から最新のもののまでを、救急の第一線での筆者自身の経験に基づき考察しまとめられた本である。診断フローチャートなどを使った診断学の書籍とは趣を異にし、考察の細やかさは腹痛診療のアートと言っても過言ではない。これほど知識に対して興味をそそられる内容は、前述のCopeの教科書にもなかった。胃腸炎、便秘症、虫垂炎、腸閉塞、胃・十二指腸潰瘍、胆嚢・胆管炎など腹痛を生じるあらゆる疾患に対して、生理学・発生学・解剖学的、また症候学的な観点から病歴・身体所見にどのような意味があるのか、仮説とそれに基づいた考察がなされている。特にそれぞれの疾患ごとに、「内臓痛」「体性痛」「関連痛」の痛みを丁寧に分けて考察されているのが面白い。また、症例を提示しつつその曖昧さに至るまで、持論が述べられているところが超実践的である。

現代の医学教育においては、残念ながら医学の学びの大半が暗記という名の「パターン認識」となっている。医師国家試験や種々の専門医試験も暗記から導き出される予定された答えがほとんどである。臨床現場においても診断マニュアル・診療ガイドラインをいかに適用するべきかが論じられやすいが、マニュアルどおりにいかないことこそ日常診療である。しかし、医師の仕事は昔も今も変わらず、患者のかたわらで共に「考える」ことではないだろうか。患者が訴える腹痛を、病名診断だけではなく、本書の仮説をもとに痛みの源に迫ることこそ、臨床医の醍醐味なのである。

著者は言う、「プロフェッショナルとは、何度も何度も同じことを繰り返し、気が遠くなるような時間をかけ、それでも自分の技術に満足がいかず精進を続けられる人」(本書p.241)と。

腹痛に関わるすべての医師に本書をお薦めしたい。

G

※本書の著者による執筆がp.518～にあります(編集室)。